

2021 年度日本語教育学会功労賞 受賞コメント

上野 田鶴子（特定非営利活動法人日本語教育研究所・理事）

「日本語教育」という言葉に出会ったのは1954年、国際基督教大学（ICU）に進学した年です。当時は日本人の渡航は勿論、外国人の来日も自由ではない終戦後9年目でした。“Come come everybody”で始まるラジオ番組の英語の時間がもっぱら聴衆を集めていた頃です。

ICUの一年次の科目は英語で埋め尽くされ、二年次からの科目は外国人教員の授業は英語でと、キャンパスはバイリンガルの日々。開学の初年度から外国人留学生が10名（当時の学生数の一割）いて、その半数は香港からの留学生の中国人、あとは欧米からの留学生でした。私が院生助手として日本語教育の教壇に立っていた頃にハーバード大学からの留学生としてJ. ロックフェラーも在籍し集中日本語を学んでいました。いつもは香港からの留学生が日本語学習の成績優秀者になっていましたが、J. ロックフェラーが学んだ年にはJayがトップとなり、その努力は見上げたものでした。



留学生の一年次は「集中日本語」が必修科目で、二年次には日本人の教員からは日本語での講義を日本人学生と共に受講する仕組みになっていました。この留学生の日本語学習は一年で新聞の読める日本語能力を目指す特訓とも言える内容で、学習者は寝ても覚めても日本語の単語カードを手を過ごす日々でした。この特訓のアドバイザー教員が小出詞子（ふみこ）先生でした。全学生にはアドバイザー教員が指定され、私は小出先生のアドバイザーになりました。直接履修する科目は二年次からで、「日本語教授法」もその一つでした。英語教育は充実していて教職課程に結びついていましたが、日本語教育は未だない時代です。しかし、小出先生がICUのその後のため、日本語教育関連科目を用意され、履修可能となり、私は四年次からSenior fellowと呼ばれる、教壇に立って日本語教育に従事する学部生となりました。これが動機で大学院への進学、さらにはフルブライト奨学生として米国ミシガン大学大学院博士課程留学となりなした。

その後は母校をはじめ、国立国語研究所日本語教育センター、東京女子大学に勤務、定年後はNPO日本語教育研究所理事長の職を与えられ83歳まで働くことができました。振り返ってみますと、師に恵まれ、多くの国内外の学生に出会い、同僚に支えられてこれまで生きてきた恩恵に気づき感謝の思いに満たされます。